

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	彭毛才旦
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) シャーキャ・チョクデン中観思想の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	根本 裕史	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	後藤 弘志	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	末永 高康	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	川村 悠人	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	赤井 清晃	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	筑波大学・教授	吉水 千鶴子	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、15世紀のチベット仏教サキャ派の学僧シャーキャ・チョクデンの『中観決択』に説かれる中観思想を考察し、カダム派・ゲルク派の見解との比較を通じて、その独自点を解明したものである。</p> <p>序論では、チベット仏教史の概要を示した後、シャーキャ・チョクデンの事績と著作、彼の帰属学派をめぐる問題、『中観決択』の内容構成、研究史について情報を与えている。</p> <p>本論第1章では、シャーキャ・チョクデンによる中観派分類の問題を考察している。14世紀以前のカダム派の学者達は、インド中観派の論師達を世俗諦に関する見解の相違によって区分し、「経量行中観派」、「瑜伽行中観派」、「世間極成行中観派」という名称を与えるが、シャーキャ・チョクデンは中観派内部での世俗諦に関する見解の相違を認めず、所化を一切法無自性という真実の理解へと導く方法の点での相違のみがあるとし、カダム派の中観派分類の議論を根底から批判した点を明らかにしている。</p> <p>第2章では、シャーキャ・チョクデンが解釈する自立論証派の世俗観を考察している。ゲルク派の伝統では、自立論証派として分類される中観派の論師バーヴィヴェーカ、ジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタの三者は、諸事物が自相と呼ばれる概念設定の根拠に基づいて自立的に存在することを主張していると考えられてきたが、シャーキャ・チョクデンは、「自相による成立」は彼らの自説ではなく、世間一般の慣習に立脚して論じられたものに過ぎず、ゲルク派が考えるような自立論証派と帰謬論証派の間の世俗観の相違はないと考え、自立論証派の思想を实在論的とみなすゲルク派の見解に再考を促している点を明らかにしている。</p> <p>第3章では、シャーキャ・チョクデンによる〈他からの生起〉の解釈を考察している。ゲルク派の解釈では、自立論証派バーヴィヴェーカは〈他からの生起〉を世俗諦として認めていると解されるが、シャーキャ・チョクデンは、バーヴィヴェーカが自説としてそれを主張することはなく、世間一般の慣習に従って受け入れているに過ぎないとし、自立論証派と帰謬論証派の存在論上の区別を否定した点を明らかにしている。</p> <p>第4章では、シャーキャ・チョクデンによるゲルク派中観思想への批判、およびゲルク派に先立つ</p>			

て成立したカダム派チャパの中観思想への批判を考察している。諸事物の成立根拠として自相を認める考えを否定した中観派チャンドラキールティの『入中論』6.34での批判対象を、ゲルク派は同じ中観派の一派である自立論証派とみなすが、シャーキャ・チョクデンは唯識派とみなして中観派内部での見解の相違を否定していること、また、彼が「二重否定は肯定を含意する」というチャパやゲルク派の解釈を退け、「自性の否定」と「無自性の肯定」のいずれをも超越した不可言なる真実の体得を目指す修道論を構想していることを明らかにしている。

結論では、シャーキャ・チョクデンが全てのインド中観派論師に共通する世俗・勝義の見解を想定し、存在と非存在の超越を特徴とした離辺中観説へと向かう修道論を一貫して追究していると指摘している。

付論では、『中観決択』等の翻訳研究を提示している。

本論文は、従来ゲルク派批判者として知られていたシャーキャ・チョクデンの中観思想にインド仏教文献の裏付けと彼自身の理論の一貫性を見出し、その独自点を記述することに成功している。引用されるインド仏教文献に対する調査と、先行研究の検討に不十分な点も認められたが、チベット仏教史の解明に資する研究として評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)